



日本記者クラブ

研究会

「イラン大統領選挙後の政治危機を読む」②

孤高のイスラム共和国か 普通の地域大国か

田中浩一郎

日本エネルギー経済研究所
中東センター長

2009年7月2日

一方には、「孤高のイスラム共和国」を志向する人たち。もう一方に、国際社会の中で地域の大國としてあり方を模索する人たち。大統領選挙ではこの外交イメージの差が現れた争点になった、と田中さんは分析した。

当日配布され、説明に使われた図や資料も参照してください。

もうすでに、イランの今回の選挙の後の、最も白熱した街頭運動というのはほとんど収束しまして、あとは、次にどういう手が残っているのか、残っていないのかということを考えるぐらいのところに来ております。

折れなかつたムサビ

先にその点だけ申しあげますと、ムサビは、選挙結果自体をまだ承服しておりませんので、彼の頭の中、あるいは心の中にはまだ不満が渦巻いています。今回、これほど多くの人間が街頭行動に繰り出したというのは、理由が2つありますて、1つは、ムサビが折れなかつたということ、つまり、断固として戦うという姿勢を示したということ。これはハタミだったら、すぐ途中で折れてしまって、なよなよとなって、みんながここではしごを外されて途方に暮れる、ということになったと思うのですが、彼は粘って最後までその筋を曲げなかつたという点が一つ。

もう一点は、最初の抗議行動に対して、あるいは抗議行動が起きたときに合わせて、それ以外の、つまり選挙に対する不満ではない、ほかの不満をぶつける人たちがこれに便乗したということです。で、騒ぎが大きくなつたのを見て、さらに入人が集まつたという点。

これによって、この運動が今回、意外と長く、かつ規模も大きく展開したということがいえます、今後の流れで考えますと、ムサビに残された手というのは、基本的にはもう街頭行動しかないので、普通の街頭行動はほとんど予期されてしまつますし、つぶされてしまつます。一遍に100万人を超えるぐらいの規模、つまり1978年、9年の革命のときのような動員力をみせつけることができれば、それはそれで治安軍に対して十分なカウンターパンチとなるのですが、おそらくそれを組織するだけの通信手段、それから組織間の連携というものはもはやとれないで、そこが難しいのだと思います。

しかしながら、別の観点から申しあげますと、おそらく唯一残された手というのは、ゼネスト

を呼びかけることなのです。ゼネストは相當にインパクトがあつて、なおかつ全国いろいろなところに展開する、波及するわけですので、これは治安軍の介入でとても一遍におさえることはできない。それは非常にインパクトのあることでありますから、ゼネストというのは一つの手なんですけれども、問題は、ゼネストを行うと、これは完全に体制に対して弓を引いたということになります。ゼネストで、ほとんどの人がそれで同調して、特に公務員が同調して、工場などをとめるということになれば、これはさすがに体制としても考えなければいけないところに来ると思いますが、逆に不発に終わると、あとは肅清しか待つておりません。ということで、ほとんど捨て身、一か八かの最後の手段ということになります。

ムサビが果たしてそこまで、いまやる用意があるかという点については、ちょっと私のほうでも何ともいえないのですけれども、仮に彼に残された最後の一矢報いる場面があるとすれば、それはゼネストということになります。

さて、今回の選挙でいろんなことが公にもなりましたが、きょうはその4つの点について、大まかに話をしたいと思っております。まず、大統領選挙をめぐつていろんな動きが出てきたということ。それから、選挙の結果についてのいろいろな疑義があるということ。そして、その疑義を押さえ込んだということによって、今後の国家運営がどういうふうに変わっていくのか、あるいはもうすでに変質したのかということ。そして、さらに大統領が再選された、这一点はどういうメッセージを国内的、あるいは対外的に持つのかということ。この4点についてお話をしたいと思っております。

熱い思いをまだ持つていた

まず、今回の選挙でございますが、革命から30年たちました。その間に大統領選挙はこれで10回目、国会選挙はすでに8回、4年ごとですけれども、行っております。それ以外にも、8年ごとに行われるのですが、専門家会議選挙とか、地方議会選挙など、いくつもの選挙を

行っております。

その時々の争点、関心というものはもちろん変わるものですけれども、今回、特にいままでなかつた局面を迎えたというのが私の印象であります。それは後で申しあげますけれども、外交に関してのイシューが、直接の外交政策ではないんですけども、外交に関しての問題が今回争点になってしまったということ。これはなるとは思っていなかつたけれども、図らずしてなってしまったという点。

それから、街頭行動にみられるように、多くの人間が1990年代の終わりからのハタミのときの改革運動にかなり失望してしまって、そしてノンポリ化が再び進んでいたにもかかわらず、改めてこの街頭行動にみられたように、多くの人間が熱い思いをまだ持っていたことを示したということです。

それから、当然、選挙に多くの人間が参加したであろうということ。これについても、今までの傾向とは全く違うものになりました。

一方、選挙自体を管理運営する側、もう少し平たくいえば体制側といつていいのかもしれないんですが、こちらのほうは選挙に臨むに際して、早い段階から選挙結果を特定の方向、再選という方向に持っていこうという意図がみえました。そして、そのための誘導が、さまざまなシグナルを発する形で行われております。そのシナリオに従って開票が行われたということが、大体私の受けている印象でございます。

それから、再選というメッセージ、これをどうしても無視しては考えられないということあります。

概要については、もうすでに松永さんのときに触れたのかもしれませんけれども、一番下の点で申しあげますと、候補者が4人おりました。再選を目指す現職に対して3人の対立候補が挑んだということです。

構図としては、保守対改革ということで、アフマディネジャド対、3番手に書きましたムサビ元首相、この一騎討ちのような構造で語られることが多いんですが、基本的に私は、ムサビを改革派には分類しておりませんし、それからアフマディネジャドとムサビという構図は、あ

くまでも1対3、つまり現職対新顔3人が挑んだ、という構図の中からムサビが抜け出したというのでしかないとみております。

今回、有権者が4,620万人ぐらいということで、過去の大統領選挙の中でも最大規模の選挙になったわけであります。

イランの国家運営について、ちょっと簡単に図のほうをごらんいただきたいのですが、よく最高指導者がいて、最高指導者が例えば国民から選ばれている大統領よりも上にあるということで、イランの場合には、国会と行政府、司法府、三権があったとしても、実際国政を動かす最高権威者は最高指導者である、というような説明をされます。

それを、ある程度国民の側からみて、どういう形で人々が選ばれていくのか、あるいは機関の代表者が選ばれていくのかということを図に示すと、このような形になるのですが、確かに最高指導者は行政府よりも上に来ますが、では、絶対的に彼がいろんな権力を行使できるのかというと、例えば専門家会議という国民から直接選出された任期8年の議会がありまして、ここを経て最高指導者は任命される、あるいは罷免されるという立場にあります。その点でも、この図でも多分おわかりいただけると思いますけれども、絶対的彼が強い立場にあるということではありません。むしろ彼の名前を使うことによって、最終的に国内のコンセンサスに締をつける、あるいはいろんな意見対立に対して終止符を打つという役目があります。

現職に肩入れしたハメネイ師

今回の大統領選挙で表面化したのは何かといいますと、まずこの最高指導者のハメネイ師がかなり偏った思考を持っておりました。三権よりも上にないので、本来であれば、日々の政治に直接かかわることなく、大所高所から指導していればよかったのですけれども、この1年あまりの間、かなり露骨にアフマディネジャド大統領への肩入れがありました。

去年の8月ごろから、大統領の目の前で、彼

に向かって、あるいは彼の閣僚たちに向かって、「さらに4年あるということを前提に事を進めなさい」というようなこともいっておりました。それが大体公になった最初の援護射撃のようなものであります。今回、選挙戦の中でも、アフマディネジャド陣営に対して、1対3の構図ですから、ほかの対立候補3人が寄つてたかって現職の批判、あるいは現政権に対する批判を述べていくと、ハメネイ最高指導者が、そんなことはない、ということで、むしろ間に割つて入るか、割つて入るだけではなく、アフマディネジャド政権の肩を持つということになっておりました。

今回、アフマディネジャドをなぜハメネイが支持してきたのかということをちょっと考える必要があると思います。アフマディネジャドはどういう人物であるかというのは、よく「保守強硬」という言葉を使っていいますけれども、それはいまはちょっと脇に置いておいていただきまして、まず4人いた候補の中からみれば、アフマディネジャドしか、多分ハメネイ最高指導者からみた場合、支持できる候補者はいなかったわけです。

キャッルービは、この人は改革派といわれている人ですけれども、少なくとも最高指導者の意向とはかなり違う政治志向をあらわしております。それから、ムサビ元首相、アフマディネジャドにとっての対立候補になった人ですが、この人は、80年代に首相を務めておりまして、その当時の大統領はハメネイ、現在の最高指導者です。ハメネイ最高指導者は、当時大統領として国民から直接選ばれる立場にありましたが、首相職というのは、実はくせ者でして、現在の憲法のもとではすでに廃止されているのですけれども、大統領が国民に直接選出され、そしてその大統領が首相を指名する。そして、その指名を受けた首相が、国会の信任をほかの閣僚とともに得るという立場にあります。

ハメネイ対ムサビの政治対立

であるので、本来は、大統領が好む人材を任用して、そこで国会の信任を得ればいいという

ことであるのですけれども、当時のイラン・イラク戦争の戦時下という状況もおそらく手伝っていたとは思いますが、国会がハメネイ大統領が指名する人事をけつたのです。つまり、ムサビさんは、大統領としてのハメネイさんが選んだ人材ではではなく、国会側が彼でないとだめと、あるいは革命の指導者であったホメイニさんがまだ存命中ですので、彼の指示や差し金によってハメネイさんが受けざるを得なかつた人選だったのです。

当然、それは何を呼ぶかといいますと、大統領の下に首相があるんだけれども、実は首相のほうが大統領よりも国会の意向を反映しているし、最高指導者の支持も得ているということで、立場がひっくり返ってしまう、ねじれ現象が起きてしまう。それがことさら80年代を通じて、このハメネイさんとムサビさんの政治的対立に発展しております。それが今回に至るまで、すでに首相をやめてから二十何年たっているんですけども、まだ尾を引いていたということはいえます。

それから、最後のもう一人の対立候補のレザーイさんという人もいまして、この人は80年代のイラン・イラク戦争中の革命防衛隊の総司令官です。やはり戦争の遂行、作戦などに関して、最高国防評議会という場が当時はあったのですが、ここでハメネイさんの路線と対立しています。であるので、保守派とはいえ、このレザーイさんもハメネイ最高指導者からみれば、かつて自分とぶつかった候補者であり、すんなりといま受け入れができるような人材ではない。すなわち、消去法でみても、アフマディネジャドさんしかいないということです。

もう一つ重要な点は、いろいろなしがらみがやはりあります。人が住む世の中ですし、いろいろな機関、人々が集った機関がお互いに、ヤクザ用語でいえば、しのぎを削っているようなものですので、しがらみがあります。貸し借り関係があって、どうしてもハメネイさんというのは、アフマディネジャドさんを推すいろいろな人たちの意向を無視することができない、という立場にも置かれておりました。

先ほどの図とは若干違うのですが、最高指導

者というのが、先ほど、てっぺんおりました。その人をちょっと下のほうに置いてきたのにはわけがありまして、実は最高指導者というのは、名前は最高指導者なのですが、ハメネイさんの場合には、かなり相対化された立場の最高指導者です。なぜこういうことになったのかといいますと、89年に彼がホメイニさんの後継者として選ばれたとき、彼の政治的バックボーン、それから宗教的な権威、いずれにおいてもホメイニさんのような力はなかったのです。それを90年代、それから2000年以降、何とか築きあげてきたわけですけれども、それは彼一人の力によったなし得たわけではなく、先ほどのチャートでいえば、最高指導者よりも下にありましたけれども、憲法擁護評議会という組織、それから彼が直接人事権を掌握している軍、革命防衛隊も含めて、こういった組織、さらに、同じように、直接人事権を持っている司法府、これらを通じて、体制のたがが緩まないように常に監視してきたわけあります。

最高指導者は、憲法擁護評議会に対しては人事権を持っています。憲法擁護評議会は、そのもとに従って選挙監督、今回も行っていますけれども、この選挙監督を通じて、反革命分子の侵入を阻止します。つまり、選挙に変な人が入ってきて、そして当選してしまう、例えばそういう人物が大統領になってしまふとか、国会の枢要を占めてしまう、というようなことを避ける、という役割を負っております。

それから、軍の組織、これは実力行使部隊ですので、やはり反革命分子を圧殺していく、封殺していく、今回のデモに対しても同じような行動をとることができるわけです。

それから、司法府。これは訴追する立場にありますので、摘発、訴追ということを通じて、やはり体制にとって、あるいはもう少し平たいえば、最高指導者の権威に挑戦するような人たちを追い出す、ということができるわけあります。

これで90年代をずっとハメネイさんは乗り切って、現在の地位を固めてきたわけあります。いうまでもなく、それぞれこの3つの機関はお互いに相互監視といいますか、相互チ

エックも働いておりますので、時々この間でのいざこざも起るんですけれども、基本的には同じ船に乗った船員、という形になっております。

これは、要は最高指導者が自分の立場を固めるために必要な措置であったのですけれども、同時にいえば、ここで、いわゆる貸し借り関係ができているということです。あるいは相対化が進んでしまったということで、ホメイニさんのような、絶対的に強い立場での最高指導者ではもはやなかったということです。

これがさらに時代とともに変質して、違う動きが発生します。最高指導者が軍と憲法擁護評議会、横をにらみながら差配してきたわけですが、これをバイパスするような形で人材の発掘、それから選挙協力という形でパイプができます。これが時々いま名前が出るようになつたのですけれども、ハッカーニという聖職者、イスラム法学者が集まるグループがありまして、ここにかなり大きな力が集まりつつあります。これによって、最高指導者を必ずしも通じないパイプが、憲法擁護評議会と軍組織、さらにここにグループと司法府との間でできていく、ということになります。神学校を握っておりますので、イスラム法学者をたくさん輩出します。彼らの就職先というのは、金曜礼拝の導師になるか、あるいは司法府、つまり裁判所、こういったところでの判事になるか、つまり、こういうところにどんどん送り込まれるわけです。

三つの組織に都合のいい候補者を推す

これはやがてどういうことになるかというと、最高指導者が直接ここら辺の組織と渡り合わなくとも、実はこの3つの組織と、いま非常にいい関係にあるアフマディネジャドさんを含めた一つの大きな共同体、あるいは運命共同体のようなものがここでできあがったという形になっています。であるので、現在のハメネイさんにとってみれば、これらの組織にとって最も都合のいい候補者でもあるアフマディネジャドを推すということは、逆にいえば、必然であったわけあります。

さて、今回、貸し借りをきちんとやっていくうえで、アフマディネジャドを再選させなければいけないというのがハメネイさんの頭の中、あるいは胸の内にあったわけですけれども、実は選挙を行う前に、保守系の法学者組織、ウラマーの組織が結束を乱します。それによって、先の票読みが必ずしも安泰ではないというような状況も生まれ、ある程度の介入を行わないと、この先の選挙結果を望みどおり担保することができない、という状況が起きる。

さらにいえば、それは何を意味するかというと、ラフサンジャニさんのことでもハメネイさんは嫌っていますが、ムサビ元首相が大統領になつたらもっと困る。それであるがゆえに、ますますアフマディネジャド再選に関与せざるを得ないという立場が発生いたします。

さらにいえば、この1年間、事あるたびにアフマディネジャド氏の国内政策、さらに外交姿勢、これらを公にハメネイ最高指導者は支持したり支援してきていますので、アフマディネジャドが落選するということは、自分の威光に大きな傷がつくということにもなります。ですから、この点では、アフマディネジャド再選しか、ハメネイさんにとっては受け入れる余地がなかったということになります。

さらに、選挙の結果発表の後、たびたびデモが起きるわけですから、ハメネイさんがそこに割って入って、何とか選挙結果を受け入れるように諭すわけですけれども、その場で常に再選というものを追認する発言をハメネイさんは行いました。それで、ますます自縛自縛なんですけれども、ほかの選択肢を最高指導者としてとることができなくなってしまっておりまます。

では、アフマディネジャドさんが本当に負けることがあったのかということなのですが、ある程度、普通に選挙をやったとしても、彼が勝った可能性というのは相応にあったと思います。私自身の選挙前の予想では、選挙が1回目の投票、つまり6月12日の投票だけで決着がつく。つまり候補者のうち1人が50%を超える得票をとるとすれば、それはアフマディネジャドだろうと思っていました。ムサビが勝つ可能性があるとすれば、決選投票にもつれ込んで、

反アフマディネジャド票を結集したうえで、ようやくそれを打ち負かす、ということではないかと思っていたんですが、第一回目で決着をつけるとすれば、それはアフマディネジャドだろうと考えておりました。

アフマディネジャド支持者の感覚

彼に関しては、いろんな否定的な意見が、特に西側のメディアを含めて出ておりますし、iran国内でも、選挙に至る数カ月前までは盛んに批判も浴びておりました。

ただ、そうはいっても、彼には彼なりの実績というものがあります。この実績を、例えば外部である我々がどう評価するということではなく、iranの選挙民、とりわけ彼が大統領であつてほしいと思うような人たちの感覚でみると、このようになります。

これ自体は私がつくったものではなく、ある作家がいろいろ連綿と書き綴ったものをまとめたものですが、もともと文化人というものは、iranの場合は一般的に改革派支持というふうにいわれているのですけれども、そういう人たちの中でも、アフマディネジャドを支持するという著名な作家もおりまして、彼が書いているものを大体要約していくと、どういうことになるかといいますと、イメージなんです。iranのイメージをどのようにアフマディネジャドは変えたかということが、実は非常に大事なんです。このアフマディネジャド支持層にとつては。

孤高のイスラム共和国というイメージ

その場合のイメージも、iranがどういうふうにみられているかというよりも、iran人としてiranがどういう国でありたいか、あるいはあってほしいかという自己投影的なイメージなのです。iranが孤立しているという、我々からみたら、現在の国際社会の中でiranが孤立しているというイメージは、この人たちには関係がなく、むしろ孤高のイスラム共和国、

自分たちが正しい、ほかが間違っている、それがむしろ彼らにとっては大事なイメージになります。間違ってはいないので、仮にそれで孤立しても、それは恐いこともないし、それをあえて取り下げることもしない。むしろ、そういうイランが好きで、そういうイランを追求するアフマディネジャドがぶれないで、ぶれずにそれをやるということを支持する、という立場であります。

そのようなイメージが今回出てきた中で、選挙戦の移ろいのところで申しあげますと、経済のばらまきの問題が、アフマディネジャドのアキレス腱になるのだろうと、大方の人はみておりましたし、私もそうみておりました。

ところが、今回、テレビ討論というものを行ったことによって、生でお茶の間に候補者同士の激突が、対決が届けられることになったわけです。その場でどういう意見、あるいは争点が表面化したかといいますと、実は外交政策に関してのイメージが、かなり中心になってしましました。特に、これはアフマディネジャドとムサビ元首相の間の対立点だったんですけれども、要は、具体的にどの外交政策というよりも、先ほどアフマディネジャド支持者が好んだアフマディネジャドのイメージのようなものなんですけれども、対外イメージがどうなったかということをかなりお互い気にしたわけあります。

もう一点、争点として挙げますと、ホメイニとともに革命を成し遂げた革命の闘士、いわゆる革命の第一世代であるか、それとも没後に革命を継承して発展させた継承者であるか、この間での対立というものをもありました、ある部分、1980年代の政策や、その決定に対して踏み込んだり、あるいはそこに立ち返ってあれこれ詮索するというのはタブーになっていました。理由は2つあります。1つは戦時中の判断であったということ。もう一つは、ホメイニさんが生きていた時代のことなので、当然その決定をホメイニさんが追認していたはずであるから、いまさらそれをひっくり返そう、あるいはその内容を問うということ自体、ほとんどしないことが不文律になってきたわけです。し

かし、こここの討論の中で、アフマディネジャドはそこに切り込んでおります。

このテレビ討論、アフマディネジャドとムサビとの間で交わされた言葉ですが、要は、いろんなことをアフマディネジャドもいいまして、先に攻めたのがアフマディネジャド、それを受けて立ったのがムサビという形で後攻になるんですが、アフマディネジャドが、例えば、うそ八百を自分がいわれて大変迷惑をしている、というようなこと。それから、自分が外交で勝利したにもかかわらず、これを否定的にとらえる風潮があるということ、こういう点に文句をいっております。

それから、これはネガティブキャンペーンなんですけれども、ムサビをラフサンジャニ、ハタミとつなげて結びつけることによって、国民の間にネガティブな感情が広がっている、あるいは見方が広がっているラフサンジャニさんのマイナスイメージをムサビに覆いかぶせて、そして相手に打撃を与えるとする、こういう戦術をとりました。

ムサビさんもそれに対して反論をしておりまして、例えば、うそ八百だという批判に対しては、うそをいっているのはむしろ政府のほうである。それによって国家が危機に瀕しているからこそ、自分が20年ぶりに表舞台に出てきた、というようなことで反論しております。

それから外交の面に関しては、現在、特に深刻になってきておりますけれども、サウジとの関係が悪化している、この点を突いております。

それから、ここが対立点なんですが、外交政策でイランの尊厳をむしろつぶしたのではないかということです。アフマディネジャド支持者は、アフマディネジャドのやり方によって、イランの尊厳がむしろ高まったというふうに思っているんですね。しかし、ムサビの立場では、いや、外からみれば、むしろイランのイメージがつぶれたというふうに理解するべきである、あるいはそのように認めないといけない、ということです。

つまり、アフマディネジャド支持者が自己投影的に自分たちのイランのイメージがこうであると、ほかがどうみようと自分たちは正しい、

ということを常に考えようとするのに対して、ムサビのほうは、いや、そうではなくて、自分たちが行ったことを外がどう評価しているかをみるべきだということ。つまり、見方が客観性を持っているのです。その差であります。

社会に走る断層

それ以外のことについては、いろいろ反論しておりますが、これは割愛させていただきまして、最後ですけれども、この選挙戦を通じて何があぶり出されたかというと、イラン社会に断層が走っているということ、断裂があるということです。

昔から、イランには都市部の中産階級とか高所得者層、それと地方の農村部の人たちとの間では考え方まるきり違う。全然別の国民と話をしているぐらいに違いますということはよくいわれていたのですが、今回、やはり選挙戦、特にテレビ討論などを通じてみておりましたと、この2つ、外交イメージに関しての対立というのは相当に広がっただろうと思っています。

つまり、先ほどからいっております孤高のイスラム共和国を志向する人たちと、いや、そうじやなくて、ごく普通に国際社会の中、そして地域の大國としてのイランのあり方を模索するべきである、と。この間の差が明確に出ております。この外交イメージが争点になったというのが、まさにハメネイさんにとってみれば、譲れない状況をつくり出したわけです。なぜかといいますと、アフマディネジャドの外交イメージを支持してきたのが、ほかならぬハメネイさんです。

もう一点挙げますと、イランの外交イメージの中には、核開発問題で国際社会と対決している中、これを一歩も引かず推し進めるんだという強硬路線もこの中に入ってくるのです。孤高のイスラム共和国というのは、そういうところも含んでいるのです。それが、選挙の結果、ふたをあけてみたら、アフマディネジャド落選、あるいは決選投票にもつれ込んだ、すなわちアフマディネジャドが50%の得票を得ることができなかった、ということは、国民の半分以

上がこの路線を支持しなかった、していないということをあからさまに数字のうえで示してしまいかねない事態を迎えることになったわけです。ですので、ハメネイさんにとってみれば、ここでアフマディネジャド政権が倒れるということは、単に自分のこけんだけではもはやなく、核問題に関してすら、国際社会からの要求を突っぱねてきたこの姿勢が問題視されている、ということに通じかねなかったわけです。

腑に落ちない開票結果発表

結果は、6月13日早々に発表になりました。驚くべきことに、何度もいっているんですが、得票差が意外とあったということ。そして、投票総数が3,900万に達して、投票率が85%という驚異的な数字にのぼったという点。これは本当であれば、そのとおり喜ぶべきことなのでしょうけれども、細かい数字がここで合わないのはとりあえず置いておきまして、どうも腑に落ちない点がたくさんあります。

これは、私が開票速報などをずっとみながら感じていたことなんですけれども、まず13日の間に、計11回、途中経過である開票速報が流れます。当然、開票率がどんどん時間とともに上がっていくわけですが、常に

一定して、アフマディネジャドとムサビの得票率がほぼ固定されているということ。アフマディネジャドが大体65%前後、ムサビさんが30%前後ということで、ずっと一定している。これは開票状況にかかわらず、どこで投票箱を開けようと、その中は2対1で、アフマディネジャドだということをいっているに等しいわけです。

それでは、全国的に人気に地域差がないのかということなのですが、実は後で内務省がだいぶおくれて発表する州別の、あるいは郡別にブレークダウンした数字をみると、ムサビが勝っているところって、それなりにあるんです。ムサビがアフマディネジャドを上回っているところというのはそれなりにあるのです、郡では。州でも2つあります。州全体でも。ということで、本来であれば、もうちょっと時間とと

もに上がったり下がったり、つまり振幅があつてよかつたにもかかわらず、あまりにもぴったりと 65% ぐらいのところで固まってしまっている、ということが非常に不自然に映ります。

それから、85% という投票率も、過去に例がないというだけではなく、ちょっと異常に聞こえるぐらいの数であります。

キャッルービという候補が、今回は泡沫候補に完全になってしましましたが、4番手の候補が 33 万票しか取れませんでした。この人は、2005 年の前回の大統領選挙にも出ていました、3番手につけています。そのときの得票が 500 万票です。得票率でも 17% です。前回の選挙のときには、2900 万人の有権者が投票したということになっていました、そのうちの 500 万ですから、決して小さくない比率でもありますし、数であります。それが今回は 33 万票に沈んだという点。

それと、これは私の感覚ではなく、内務省が認めていることなのですが、4620 万人の有権者に対して 5900 万の投票用紙をあらかじめ刷って全国に配っております。イランの場合には、自分の住んでいる地域の投票所で投票しなければいけないという縛りは実はないんです。であるので、テヘランの人は、どこか地方に金曜日に旅行して、その出先で投票しても構わないんですが、それにしてもこのさばの読み方がすごくて、1300 万票も余計に刷ったということに驚かされるわけです。

1300 万票も余計に刷った投票用紙

ところが、これも内務省が発表していることですけれども、投票日 12 日に、いくつかの選挙区で投票用紙が不足するんです。要は、1,300 万票も余計に刷って、ある程度サバを読んで多目に配っていたはずの投票用紙はどこに消えたんだということです。

例えば、A というテヘランの近郊のどこかの町で投票用紙が足りなくなってしまったのであれば、テヘランから、あるいは近郊の町から、余っているところから投票用紙を再び回せばいいはず

なんですが、内務省が行ったのは何かといいますと、投票用紙をまた当日に刷り増すんです。どう考えても、地方の都市で起きた投票用紙不足を埋め合わせるために、1 日しかない投票日の途中で、テヘランで投票用紙を刷り増して、それを地方に届けるということは、時間がかかり過ぎるわけです。当然、本来であれば、その州の州都、あるいはより大きな都市に余っている票を横に回せばいいだけの話なんですが、それができなかつたということ。つまり、1,300 万票余計に刷ってあったはずの投票用紙が、どこにどういう形で配られ、あるいは使われていたのか、すでに事前に使われていたのか、がわからないわけです。その点の説明責任は一切果たされておりません。ということで、大きな疑問がわくわけです。

それと、前回の 2005 年の選挙のときにもあったのですが、選挙の前々日に世論調査結果というものが出来ました。そのときに、2005 年のときには泡沫候補でしかなかったアフマディネジヤドが突然そこで 2 位につけて、あれよあれよという間に決選投票に持ち込んで、最後はラフサンジャニ元大統領を逆転してしまうわけです。今回もそれがあるだろうなと思っておりましたら、出ました。官制のメディアといいますか、公的なメディアを通じて、いろんな数字が出ましたが、こちらで流されたのは、全部アフマディネジヤドが大体 65% ぐらい、それからムサビが 30% ぐらいという、図らずも 13 日に発表された結果に限りなく近い数字であります。

この世論調査をどの機関が行ったのかということについては、どのメディアも応じていません。いくつもの数字が踊るんですけども、大体数字は似たりよったり。しかし、行った機関の名前が一つとして出ない。つまり、最初から用意されていた数字だけをいろいろ適当に流したとしか思えないような報道なんですが、何のために必要であったのかといいますと、いわゆる組織票をどこに流すかという、そのシグナルなんですね。

前回は、2005 年のときに、アフマディネジヤド候補に、最後の最後の段階で、保守など

の組織票を回すというシグナルとしての世論調査結果の発表だったわけです。今回は、組織票は予定どおりアフマディネジャドに流す、つまりガチンコでやっていくというのが今回のシグナルであったと思います。

前回の選挙の話で、ついでに申しあげますと、7人候補者がいた2005年の投票のときに、第1回投票ですが、2900万人の人間が投票したと申しあげました。その7人の候補者のうち、ラフサンジャニ元大統領、キャッルービ元国会議長、モイーン元高等教育相、それからメフルアリーザード副大統領、この4人が大体アフマディネジャドさんとは多分対局に位置する政治的思考の持ち主なんです。改革派の人たちもいますし、改革派とはちょっと違うんですけども、少なくともアフマディネジャドではない、反アフマディネジャド陣営と考えてもいい人たちです。彼らの票は、2900万人が投票したときに、1600万人を超えてるんです。ですから、半数を超えるぐらいの票、もちろん票も割れたんですけども、この4人で1600万票ぐらいの票を取っているんです。

しかしながら、今回はどうだったのかというと、3900万人が投票している中で、ムサビとキャッルービの30万を合わせても1400万に届かないんです。で、3900万人の人間が投票に出てきた、つまり前回よりも1000万人軽く多い人間が投票に出たというのは、現象としては、いわゆる無党派層、あるいは無関心層が選挙に出てきた、投票所に足を運んだということを意味しているわけです。彼らは普通、過半数以上は改革派か、あるいはムサビの支持者であると考えられるわけですが、であれば、当然、前回の1600万票か、それを超えるぐらいの得票をしていたほうが自然に映るわけです。けれども、今回はそれよりも低い数字になってしまっているということ、これも非常に奇異に映るところであります。

第一回投票で再選というシナリオ

ということで、いろんなしつぽがみえるわけですが、これで一つ仮説を立てるとどういうこ

とになるかというと、やはり第1回投票で再選をさせなければいけなかったという、そういうシナリオが用意されていたということですね。それを実現するためには、票の分散を避けなければいけない。つまり、50%を下回ってしまうようなことになってはいけないということ。

それから、有意差を確保する。これはどういうことかといいますと、仮に第1回投票でアフマディネジャドが勝ったとしても、51対49、つまり薄氷の勝利では、先ほどいました、ハメネイさんとかにとってみれば非常に都合の悪い数字になるわけです。国民の半分は路線を支持していないということを示しますので、確実に有意差を確保しないといけないということ。

それで、この判断に基づいて選挙をコントロールすることになると、ムサビさんの得票というものを実際にカウントしたら、それに倍ぐらいでアフマディネジャドについていくというようなことで、常に下駄を履かせていく措置が必要であったのだろうと思います。これはある程度成功したんだと思います。

ところが、問題は何によって生じたかというと、予定外だったのは、あるいは想定外だったのは、実際に多くの人が投票所に来てしまって、体制側が考えた以上に来てしまって、投票用紙の不足という極めて不自然な事態が表面化してしまったということ。

そして、きちんと仮に数えたとしたら、今回、憲法擁護評議会が10%の票の数え直しということを行いまして、ほとんど差はなかったということを29日に発表しておりますが、本当にきちんと数えたら、投票率が100%を超えたかもしれないのです。つまり、有権者数以上に刷られている1300万、さらにいえば、3900万人が本当に選挙に来たのだとすれば、さらに700万分、残っている票がまだあるわけですから、2000万票をどういうふうに使ったのかわからないんですけども、1300万とか2000万を適当にアフマディネジャドに振り分けるような形で、事前に投票箱に入れていたりしたら、それをきちんと全部数えていって、4人の候補者を足すと、4600万を

超えかねなかったわけです。超えたら、やはりそれはおかしいという声がもっと多くなりますので、どうしてもここはさじ加減を変えなければいけない。

その結果、何があったかというと、一つは、アフマディネジャドとムサビを2対1にした以上、ほかの人間を圧倒的に減らすしかない。つまり、仮にムサビやキャッルービに票がついていたとしても、それはそのとおりカウントするわけにはもはやいかないということです。それをアフマディネジャドにかけかえるか、あるいは完全に白票扱いして0にしてしまうか、カウントしなかったことにしてしまうということをやらざるを得ないです。

今まで、イランの選挙に関しては、得票率を水増しして、多くの人が投票に来ていますよという、そのイメージを与えるための数字の操作はあったと思っておりましたけれども、今回のこの事態をみていると、実は2005年の、ラフサンジャニさんが結局落選することになったアフマディネジャドとの決戦、その決選投票の前の第1回目の投票でも、実はアフマディネジャドとかキャッルービなど、ほかの対立候補にラフサンジャニの票をつけかえて、あえて決選投票を演出したのではないか、ということを思ってしまうところもあります。

ただ、これは4年も前の話ですし、当時のこととが、記録として残っている数字以上のもので示すことができないので、本人も異議も申し立ててしませんから、これは外野である私どもがどうこういっても始まらないんですけども、その疑惑も生じるわけあります。

ムサビが当然、今回は当事者として一番大きな声を張り上げて、選挙結果への異議を訴えていますが、いろんなことをいっている中で、私がここにいて経過をみていてもおかしいと思うことは、彼もやはり当然のことながらおかしいと思っていたようあります。

不満が生じて、結果に対して抗議デモを行うということがムサビ陣営の呼びかけによっても行われましたし、便乗組も含めて自然発的に拡大したわけですが、これはほぼ封じ込められました。

封じ込められた抗議デモ

この封じ込め方なんですけれども、これは非常に手慣れたものがありまして、まず彼らのほうが時間稼ぎをしたのです。憲法擁護評議会が異議申し立てを審査するうえで、10日間という猶予が与えられています。その時間をフルに使いました。フルに使ったのですけれども、6月24日に結果を発表する予定だったにもかかわらず、まだ間に合いませんということで、5日間の特別延長を申し出て、それを認められております。本来、これは憲法違反ですけどね。

では、5日間は何のために必要であったのかということになるのですが、実は、これは体制の中でムサビの意見に耳を貸す人間ができるだけ切り崩して、そして体制の側に引き戻すということが必要な時間だったわけです。アフマディネジャドさんと正面からぶつかっているムサビさんはもちろんのことなのですが、問題は、6月19日の金曜礼拝でハメネイさんが演説を行った際に、観客の中に欠席が目立った人がいます。

欠席が目立ったというのはどういうことかというと、数のうえではなくて、何でこの人がいないのかということで、明らかに変な様子があつたわけです。で、いなかつたことは、ムサビ当人ですね、アフマディネジャドとぶつかっていますし、その結果を追認しようとしているハメネイともぶつかっていますので、ムサビが出てこないというのは理解できる。それから、キャッルービ候補も同じように異議を申し立てているので、これも来ない。これもわかるんですが、ラフサンジャニさんがいなかつた。それから、ハタミ元大統領もいなかつた。彼らは明らかに6月19日の段階では、ハメネイ最高指導者の意に反して、抗議行動の側についていたということは間違いないわけであります。それを何とか切り崩すための10日間であったわけですが、それでも足りずに、さらに5日間を使った。

最後、ラフサンジャニさんが折れますので、24日の発表を29日までに延ばしたときに、最も大きく変化したのは何かというと、ラフサ

ンジャニが折れたということです。ラフサンジャニがハメネイ最高指導者に対して恭順の意を表明したということがこの間で起きた最大の出来事であります。

99年、03年の記憶を呼び覚ます

あと体制の側として、1999年のテヘラン大学学生寮襲撃事件、非常に痛ましい事件があったんですが、それとか2003年の学生の街頭行動を鎮圧したときの衝突事件、こういったときの記憶を呼び覚ますことで、大衆が抗議行動に参加しないように、あるいは距離を置くように仕向けました。

例えば、当時行ったことで今回も行われたことは何かというと、活動家をどんどん逮捕していました。ほとんど関係ないような人たちも逮捕されていまして、非常に気の毒なんですけれども、とにかく大量逮捕が続いています。それから、通信とか報道規制がしかれた。そして、要是恐れさせるというか、恐怖と戦慄ということで、人がデモに参加しないようにさせる、そういうイメージを与えるために、再び今回もテヘラン大学などの学生寮を襲撃しました。実際に学生寮にいる学生たちがデモを指揮しているわけでも何でもないんですけども、99年とか2003年の記憶を呼び覚ますうえで、同じことを今回もやった。

それから、デモの参加者がたくさんいるときには、さすがに官憲も白昼堂々と手を出すことはできない。何をやるかというと、夕暮れになって、デモが解散したときに、いくつかのグループがデモ参加者を追跡をするわけです。住んでいるところとかを特定したうえで、闇に乗じて彼らを襲撃する、非常に恐いやり方ですね、それを実行しました。

それから、ユーチューブなどインターネットのうえで随分注目を集めましたけれども、女性を含めて、発砲によって殺すこと、傍観者であっても殺すことを許可するような動きがあったと思われます。

いま、ネダという女性のビデオが外に流れた

ということが体制の中でも大分問題になっています。何をしているかというと、これも嫌らしいやり方なんですが、要は、あれがでっちあげだ、ネダを撃ったのは、ネダのそばにいた人間である、つまりバシージだの体制側の人間ではなくて、デモ側からの発砲による殺害であるということを一生懸命いま官製のメディアを通じて垂れ流しています。それから、介抱した医者が実は撃った本人であるとか、とにかくありとあらゆる手を使って、この事件の真相と彼らがいうところのものを暴露しようとしています。

あと、外国から選挙カバーのために入っていたメディアをどんどん追い出したりして、彼らが報じないようにして、彼らによる扇動をむしろ喧伝することによって牽制を行っております。これがさらに発展しまして、BBCなどがむしろこれを首謀したかのような扱いを受けて、イギリスの大蔵館を含めて、非常に強い政治圧力のもとに現在置かれております。

私が今までイランとつき合ってきた中でいっても、多分こういう対応は、非常に極端といいますか、時々使うんですけども、それでも、これだけ執拗にやるというのは非常に極端な事例に入ってきたと思います。

さらに、今回の、もうすでに鎮静化しておりますけれども、ここまでやってもデモがまだ続いているようであれば、いよいよ革命防衛隊を投入して、その際には反革命運動というレッテルを張ってこれを鎮圧するという手になっておりました。当然、そうなっておれば、より多くの血が流れたであろうということは間違いないわけであります。

万策尽きたラフサンジャニ

今後の動きでありますが、冒頭申しあげましたように、ムサビはゼネストを呼びかけるぐらいしか手はありません。体制利益判別評議会、これはラフサンジャニさんが議長を務めておりますけれども、ここはもう最高指導者の指導に従うということで恭順の意を示しております。専門家会議については、最高指導者の罷免

權を持ってはいるので、ここを何とか動かすことによって、ラフサンジャニさんがハメネイさんに一矢報いるか、あるいは牽制するかというようなこともあったようなんですけれども、これも動かなかつたということで、ラフサンジャニさんの万策は尽きたという感じがいたします。コムの神学校についても、宗教界は体制支持が主流になっています。

今回の騒ぎをみていて、内務省と憲法擁護評議会という選挙を司る2つの機関は、仮に次回の大統領選挙が予定では2013年に行われるんですけれども、4年後に行われるに際しては、もっと厳しい事前資格審査をかけて、ムサビさんのような、ある程度野党の核になつたり、あるいは反対運動の中心人物として祭り上げられるような人が最初から出ないようなベッティングシステム、いわば事前資格審査の体制をしく可能性が増したと考えております。

それから、ラリジャニさんという国会議長、それからガリバフというテヘラン市長、これは両名ともアフマディネジャドに対しての対抗馬として2005年の選挙を戦ったのですが、今回の選挙はパスしております。いずれも保守派の陣営なので、アフマディネジャドの後を推そうとすれば、この両名である可能性がそれなりにあるんですけども、純粹に体制側だけにくみする発言をしていると、アフマディネジャドの側について、アフマディネジャドのいっていることを支持する、そしてその中に埋没してしまうということになりますので、ちょっと物言いには注意しているようです。だからといって、ハメネイ最高指導者や体制に対して反抗の意を示すということではありません。あくまでも次回をにらんで賢く動くという選択をしております。

今後の国内と国外の流れでみておきますと、アフマディネジャドさん再選ということになりました。いままでも唯我独尊という傾向が強かったのですけれども、多分それは今後とも続きますし、さらに強化される。そして、強権姿勢もますます強くなると考えております。テレビ討論の場でも、この4年間は耐えに耐え抜いたということで、かなり不満をあらわにしてお

りました。そこで、自分のめでたき再選に合わせて、このようなデモの抗議行動を洗礼として受けた以上、それをまた再びにこやかに受けて忘れるというような人ではありません。当然、これは強権姿勢が強まります。

強権姿勢が強まる

それと、別の観点から申しあげますと、閣僚人事についても、今まで彼は、自分のやりたいようにはやらせてもらえたかったという不満を常に持っていました。4年間の間に、特に3年目以降は、経済閣僚を一生懸命変えて、自分のやりたい経済政策が進められるように変えたわけですけれども、まだそれをやり足りないとと思っているところがあります。当然、8月の第二次アフマディネジャド政権発足に際しては、3分の1ぐらいは多分かわるのだろうと思っております。

この前、別の場所で申しあげたんですけども、多分モッタキ外相が更迭されるんじゃないかと私は思っていますし、あと石油大臣も、順番からいえば、石油大臣のほうが多分更迭される可能性が高い。そして、モッタキ外相も、元駐日大使ですが、彼も交代となる可能性が高いとみております。

国際的には、政権発足の第1期目、2005年のときに、これはちょっと不幸なことだったんですけども、当初から彼は強硬派というレッテルを張られ、それからアメリカ大使館占拠事件に関与したとかいって、いろんな写真が暴かれたりして、実際には関係なかったのですけれども、非常に不幸な出発点がありました。それに対して常に不満を持っていたわけです。

今回は、それに加えて、自分が当選した選挙に対しての正当性が疑われるような形になり、そしてデモを封殺したということでのマイナスイメージ、対外的な、国際的なマイナスイメージが加わって、さらにいえば、彼の再選を祝福するような祝電が極めて少ない、国外から寄せられたものがあまりないということで、相当にひねくれるというか、疎外感を味わうのではないかと思います。それは、当然、対外的な政

策、アプローチにも影響を及ぼすものだと思います。

そして、これはいま起きていることでもあります、外国による干渉ということで、今回の選挙に対しての妨害や介入というものを厳しく糾弾する姿勢を示しております。イギリスがやり玉に挙げられているということは申し上げましたけれども、これがすでに出ていますけれども、G 8 のトリエステ外相会議の声明に対してもイランは反発しておりますので、この先、サミットが開かれた後の最終声明などにも、当然イランへの注文がふえると考えられます。それへの反発というものも当然出てきますし、その返す刀でというか、投げられたボールを投げ返すように、より強い外国の関与、干渉というもので、いろんな国への批判をぶちまけるようになるとみております。

革命防衛隊が今回いろいろな声明を出しておりますが、これは大体アフマディネジャドの考えていることとも一致するので、抜き出しておきました。文章はともかく、アンダーラインを引いたいくつかの言葉です。要は、巨大な陰謀であると。こういう騒ぎが起きたのは、陰謀であるということ。それから、革命防衛隊としては断固たる措置をとって対処するということ。それは対決をいとわない、ためらわないということです。暴民との対決をいとわない。

それと、各国に対して、アメリカ、イギリス、イスラエルもやり玉に挙げていますけれども、内政干渉と脱法者の支援の件で警告ということで、非常に強いトーンで、今回、存在感をあらわしております。

大統領再選は何を意味するか

最後になりますけれども、大統領再選の意味とかを考えていきたいと思います。当然、この大統領が再選されたということは、先ほど申し上げましたように、ハメネイさんにとってみれば、これでなければ困るということでもありますけれども、同時に彼を選んだということによるメッセージも含まれております。

要は何かというと、現時点では変わらないということを対外発信したわけあります。アメリカでオバマが誕生したときに、「チェンジ」ということを一ついつておりますけれども、イラン版のチェンジがないということをここで明らかにしたわけであります。それは核開発問題における対応、あるいはアメリカと関係修復に対するアプローチ、それから中東和平など、イランがことさら自国の問題ではないところにあれこれと発言する、発信すること、あるいは干渉することへの態度、これを変えないということ。これらを変えませんよといっているわけです。

それから、国内政策では、選挙期間中もアフマディネジャドがいっておりましたけれども、現行路線は維持するといつてありますので、ばらまき政策なども続けられるということになります。

背景をみると、非常にこれはイラン的というか、勝手な見方ですが、アメリカで共和党政権が負けて、民主党政権のオバマが誕生したということは、それまでのブッシュ路線、つまりイランに対しての強硬路線が負けた、すなわちイランの言い方が正しかった、そういう展開になります。イランの正しさが立証されたので、それを進めてきたハメネイとアフマディネジャドの路線が勝利した、だから、これを変える必要はないというのが彼らの理屈であります。

ただ、アメリカからのアプローチに対しては、実はオバマ大統領がいろいろ対話ということをいうたびに、イラン側の指導者は、言葉ではなく態度で示せということで切り返してきておりました。ただ、それもいつまでも同じことをいっていることもできず、若干イラン側も困っていたところはあります。

オバマ米政権との関係は

困っていたのは2つあって、1つは、オバマが本当に対話を求めているのか、それともイランを封じ込めようとしているのかがわからないということ。就任以来、赤で示したのはイランに対して厳しい対応をとったとき、すなわち

アメとムチでいえばムチに当たるところです。それから青で示したのがアメに当たるようなところなのですが、交互に出てくるので、オバマが本当にイランと対話したいと思っているのかどうかがよくわからない、そういう戸惑いがありました。

ただ、問題はもう一つあって、言葉のうえでいってきていることに対しては、じゃ、イランは行動で示せということでやり返せたんですが、下の2つにあるように、ハメネイ最高指導者にあててオバマが書簡を出してきたとか、アメリカの独立記念日レセプションに招待するとか、こんな話が出てくると、これは行動になってしまふので、この行動に対してどうイランが行動でもってこたえるかというところが、もはや間際に迫っていたわけであります。であるので、行動で示さなければいけない、イラン側が対応しなければいけない状況に陥っていたというのも間違いないわけであります。

外交面でみますと、もうすでに選挙というのはいろんなマイナスの点を残して、あるいは発生させてしまっております。オバマが当初は非常に慎重な物言いで、選挙の結果に関してコメントすることは控えておりましたけれども、あまりにもデモに対しての暴虐な取り締まりの様子がメディア、ネットを通じて報じられるにつれ、そしてアメリカ国内、特に議会からの突き上げが増すにつれて、オバマもついにはイランに対して批判的な姿勢、さらに選挙に対しての疑問を呈さざるを得なくなつたわけであり、そして、この事態はイランとの直接交渉が影響を受けることは間違いない、というコメントも出しますに至つたわけであります。

それと、今回行われたG8トリエステ外相会議に、モッタキ外相が、アフガニスタンとパキスタンの問題を協議するということで招待されていたんですけども、これをけつております。それから、アメリカ独立記念日のレセプション、7月4日ですが、この招待は結局取り消されました。アメリカ側の説明では、特に返答もなかつたということなので、自然消滅のようにもみえなくもないのですが、取り消されたということであります。それと、現在起きてい

るよう、イギリスとの間での外交関係の縮小というのが具体的になっております。

この先、もうすでに届いてはいるんですけども、実際にイラン側が行動で返していない、オバマ大統領からの親書、書簡、これをどうするのかという問題。それから、P5プラス1、常任理事国とドイツ、さらにEUを加えた協議にイランが再び参加するかどうか、という問題もあります。

一方、イランとアメリカとの関係改善がぎくしゃくというか、前に進まなくなつたときに合わせたかのように、今度NATOとロシアの関係改善が、ほぼ10ヶ月ぶりに明らかになって、何となくイランの封じ込めに向かって再び国際社会が動き出したのかなということを思わせるような環境がいま出てきております。

今後、イランの命運はどうなるのかということですけれども、選挙結果はもう変わりません。まさに最高指導者がここまで踏み込んだ以上、これを撤回したり、変えるということは絶対にないわけですけれども、一つハメネイさんが読み誤っていたとすれば、やはりハタミさんとムサビさんが違うということ、つまり97年から2005年まで大統領をやつたハタミさんは、やはり同じイスラム法学者、ウラマー、聖職者でしたし、ハタミさん自身がインテリでしたので、あまり面と向かって最高指導者の意向に楯突くようなことはしなかつたわけです。その点では、だから、どこか落としどころをハタミさんのほうが模索するということでさやをおさめていたところがあるのですけれども、ムサビさんの場合には、やはり80年代の経験というか、記憶がまだありますので、彼からみれば、ハメネイ最高指導者というのは、最高指導者というよりは、80年代に自分がさんざんこけにしたかつての大統領でしかない、そういう立場であるので、一生懸命食つてかかったということがあります。

イスラム共和国の「共和制」の部分が色あせた

気をつけなければいけないのは、今回、アフマディネジャドを再選させる、いってみれば、

ハメネイさんからみた、あるいは体制の枢要にいる人たちからみた統治体制の安定、当座のところの安定というものを重視して、むしろ民意を問うという民主主義として彼らが常に掲げていた大事な看板を、おろしたとはいいませんけれども、かなり汚してしまったということがあります。

というと、イスラム共和国、これはイスラムの部分と共和制の部分と、2つが実はハイブリッドでくっついているようなものなのですが、この共和制の部分が大分色あせてしまうか、毀損してしまったということになります。強硬派のウラマーの中には、イスラム法学者の中には、イランはイスラム共和国ではなく、イスラム国であるべきだ、つまり共和制を廃止すべきだ、というような極端な意見もあり、そういう人たちとアフマディネジャドなどが実は近いという話もあるので、実はそういう方向にイランが徐々に進んでいっているのではないか、ということを想起させるような状態があります。

調停者の機能がなくなった

それから、最高指導者ハメネイがここまで肩入れ、実際に入ってしまったということについては、彼がやはり大所高所からいろいろな国内の問題に関して調停者や仲裁者として機能してきた、その役割をみずから放棄したということになります。

今後、アフマディネジャドが国内でより強権的性質をあらわにするということは、先ほど申し上げましたけれども、そうなると余計に摩擦が国内ではふえるということになりますので、そういうときこそ仲介者、調停者というのが機能しないと本来はいけないのですけれども、その実物がいなくなってしまった、あるいはそういう機能が果たせなくなってしまったということは、体制の安定というものを考えた場合に、かなりダメージを与えると思います。

かつて、最高指導者がいろんな形で仲介や介入した例というのはありますけれども、それにおいて非常に大事な、国を二分するような

政治対立が生じたときには、とりわけこれが大事であります。

今後の流れでみると、イランが革命30年を迎えて、最初の10年というのは、実はホメイニさんが生きていたホメイニ期なんですが、それでも、そのときには、革命の直後の混乱、それから革命後のいろんな政治勢力間の対立、淘汰、そしてイラン・イラク戦争ということで、合わせますとほぼ10年間、実は不安定な時代だったのです。

ホメイニさんという強い指導者はいたけれども、実は国の体制というのはかなり不安定なときでした。それに比べると、ホメイニさんの後、ハメネイさんが継いだ、いまに至るまでの20年間というのは、99年のような民衆運動などもありましたけれども、基本的にはうまく調停機能が働いて、そしてイランが国内的には、政治体制のうえでは安定した20年間だったのですが、指摘しましたように、この調停者や仲裁者としての役割が果たさせなくなるということは、再び今後、不安定に回帰していく、ということを思わせる予兆ではないかと私は思っております。

そして、これは体制全体の問題なのですが、民主体制がいいかどうかは別にして、あえてちょっと違う表現を使うとすれば、例えば今回、選挙の結果に異議を唱えているデモに対して、アフマディネジャド大統領が14日、選挙結果が発表された翌日に、そういった人たちと、「ちりやほこり」というような表現をして、非常にさげすんだ言い方をしております。実際、彼らみれば大したものではないのかもしれないですが、エミッション、いろいろなちりやほこりが発生するということ自体、経済の観点からみれば、いわゆる公害のようなもので、外部不経済である、と。外部不経済を何か取り込まないと、最終的には生活環境を含めて生存環境が脅かされる、それをこの体制が果たしてきちんと内部化できるかというところに、ここはまさにかかってきているわけであります。

現状のやり方は、残念ながら、内部化できない、あるいは内部化することを拒否したまま外を無視する、自分たちの周りに何が起きている

かということを無視したままの流れ、あるいは体制の動きということになっておりますので、それが調停機能がない中でいえば、さらに不安定期への回帰、ということではないかと、予言するわけではありませんけれども、みております。

ちょっと長くなつて申しわけありませんけれども、以上が、私がいま現在イランのアフマディネジャド再選について考えていることがあります。

どうもご清聴ありがとうございました。

《質疑応答》

司会（脇祐三企画委員・日経新聞論説副委員長） どうもありがとうございました。

この前の松永さんのお話では、革命第一世代と、それから非聖職者の第二世代、特に革命側の人脈だとか、その世代間闘争的なところにかなりウエートを置かれていたように思うんですが、逆に、ハメネイをうまく利用する形で、第二世代の非聖職者が政治の主導権を握る流れというふうにみてよろしいんでしょうか。

田中 そうですね。時間軸で、この先どれぐらいの変化を予兆していくかにもよると思うんですが、この選挙をめぐって、そして、多分今後数年間、アフマディネジャドが第二期政権を終えるぐらいまでの4年間と考えてもいいかもしれません、それは基本的にこのままだと私は思っております。

ただ、松永さんの指摘も、私は別のところで議論したこともありますので、十分理解したうえで申しあげますと、長期的には、まさに第二世代や第三世代、そして法学者、聖職者の統治だけではなくて、違う形、特に軍部の発言権、あるいは経済権益、これらを含めたグループの台頭というものは無視できないと思います。

ただ、彼らが表立って全部をとろうとするかどうかというのは、ちょっと私はまだ疑問を持っておりまして、表立ってとるということは、先ほどの共和制の部分とまさにかかわってく

るわけですし、ウラマーの側は共和制を排除したいと思っている人もいる一方で、逆に、いまの体制 자체をいじることに不安を感じている人たちもあります。

軍部も、ウラマーと同じではないんですけども、違う観点から、例えばクーデターのように、強権ですべての実権を掌握する、ということを望む側と、あくまでもワンガードとして自分たちが一歩後ろから、この体制の屋台骨を支えていくという役割に徹しようとする人たちに分かれていますので、全部が同じ方向に向いて動いているということではないと私は思っております。

影響力があるのはCNNよりBBC

司会 外国の干渉という理屈づけで、直接の矢面にされているのはイギリスのBBCとイギリス政府という形です。いまアメリカと直接の外交関係がないこともあるんでしょうが、ある意味、オバマ政権のエンゲージメント政策に対して、イラン側から手荒なことはしたくないという疑惑も、それなりにあるという解釈でよろしいでしょうか。

田中 アメリカをやり玉に舉げることももちろんしているんですけども、実態として、アメリカ大使館がありませんし、アメリカのCNNはいましたけれども、自分たちがいの一番に攻撃するような対象としてはやっぱり小さ過ぎたんだと思うのです。

もとから、78～79年の革命運動も含めて、BBCのラジオ放送というのは、イランの社会の中にかなり浸透していまして、これがイランの78～79年の革命に非常に大きな影響を及ぼしたんです。その点から、BBCの名前、それから影響力、浸透度というのはかなりあって、イラン社会を動かし得る力としての存在は、実はCNNではなくて、まだBBCなんだなということを、今回のイギリスに対しての非難デモの中で改めて確認した次第です。

ご承知のように、オバマとの対話路線をイラ

ン側から完全にけるということはしたくないわけですし、それは何らかの形で譲歩を引き出すことかできれば、特に経済面で譲歩を引き出すことができれば、それは願ったりかなつたりですで、その部分をあえてつぶすことは、さすがにしたくない。であるから、アメリカの権益、いまはないんすけれども、直接攻撃するようなスローガンを掲げるよりも、イメージ的に、イランに介入してきたということを、つい最近までも、そのあかしをみることができるB B C及びイギリスに向かた、ということではないかと思います。

また、ちょうど間が悪かったといえば間が悪かったのかもしれませんけれども、イギリスにおけるイラン資産凍結の話がちょうど出たときでもありましたので、イラン側は、実態としてはほとんど影響がないというふうに強弁しておりますけれども、行為としては明らかに敵対的行為に当たりますから、タイミングは確かに悪かったのだと思います。

質問 いまのハメネイさんとかアフマディネジャド大統領とかというのは、イランというのをどういう国にしていこうとしているのか。非常に国民の所得格差が広がったり、地域格差が広がったりしているのも現実ですし、資源頼りも一緒ですけれども、何をやっていこうとしているのか、それが第一点の質問です。

第二点は、日本にとってイランの石油というのは極めて重要だと思っているんですけども、それを中東の国の体制がどうあろうと、彼らのいろんな状況で、石油は何らかの形で出てくるというのが過去の経験だと思うんですが、日本からみた場合に、そこの国際関係の中におけるイランというのが、こうあるのが日本にとっては非常にいいんだと……。いまのほうがいいのかもわかりませんし、そのところがどうなのかなというのが第二点。

第3点が、日本とイランとの関係については、常に英米がいろんな石油の利権の問題も含めてコミットメントしてくる可能性が常にあるわけですけれども、そのところとの関係で、日本とイランとの関係というのはどうあった

ほうがいいのか。

「尊厳」をいかに高めるか

田中 ご質問ありがとうございます。

ここ一番下に書いたように、やっぱり前者、つまり「正義と公正を追求する孤高のイスラム共和国」というのが、どうも彼らの目指すところであります。

その場合には、要は安全保障の面でいいますと、どれだけ脅しがあったとしても、実際にイランを攻撃するなんてばかげたことは、こればイスラエルであろうとアメリカであろうと、できっこない、というほとんど信念のような考え方、あるいは見方、それに基づいております。また、自分たちがイスラエル、パレスチナ和平、中東和平にいろいろ発言したり、その反対派といわれる人たちを支援したりすること自体についても、これは自分たちが正しいことを追求しているからこそ行うのであって、それによってイランの孤立、あるいはイランに対しての軋轢が高まったとしても、それは自分たちが正義を貫いている以上、構わない、いとわない、というほとんど信念のようなのがあると思います。

イランをそういう状態に引っ張っていったとしても、ここはある部分おごりなんすけれども、石油、天然ガス、それ以外の鉱物、それと地政学的な位置づけ、そしてペルシャ湾への出口であるホルムズ海峡に対してのにらみ、これなどを含めて、世界が結局イラン、イスラム共和国という国の存在と言い分をのまなければいけないはずだ、というところまで考えているようなんですね。であるから、折れない。あるいは妥協、あるいは立場に関して交渉する必要がない、というかたくなな対応になるのだと思います。

2003年ごろから、ハタミの末期のころなんすけれども、ハメネイさんと、取り巻きの保守派の連中がいい出した言葉があります。外交の基本路線として、観念論みたいなものなんですが、あるいは精神論みたいなものなんです

けれども、外交路線として示した3つの言葉があるんです。それが、「尊厳」、「英知」、それから「最良の選択」というものです。それぞれ、もともとアラビア語で、ペルシャ語でも入っている言葉ですが、3つの言葉に集約されるんですけども、それが外交の要であると。

いまイランが何をやっているかというと、まさに尊厳の部分を最大限持ち出して、イランの尊厳をいかに高めるか、あるいはそれを拡大していくか、それを譲らずにいくか、というところを出している。それがいまのイランのあり方であるかと思います。

日本からみてのイランですが、経済権益という観点で考えますと、いま国連経済制裁、安保理経済制裁が働いてしまっており、非常に動ける余地が日本単独では限られてしまっているんですけども、そこに至る前の段階であれば、実はイランが適当に孤立している状態というのは、日本にとってそれほど悪くなかったのです。

ただ、いかんせん日本の場合、東京の場合には、ワシントンの意向を物すごく気にするということがあるので、実際にある程度フリーハンドとまではいかなくても、動く余地があったときでも、結局は動かなかった。いま安保理制裁がかかってしまうと、ますます動く余地がないということで、本来であれば、イランが多少孤立していくことがあったほうが、日本の独自チャネルというものが使えたり、あるいは日本の動く余地が残されているということで、重宝がられてきたわけなんですけれども、いまとなってはそれはほとんど機能しなくなる。

むしろこれからは、イランが普通の国になって、国際社会の一員として迎え入れられるような状況に再びなることが、日本にとっても実際の活動を行ううえで、よりやりやすい状況になるのだろうと思います。

それはまさに3点目でご質問していただきました、アメリカなどがいろいろ口を挟んでくるということにも直結するんですが、基本的にイランが何らかの問題を抱えているというふうにアメリカが主張する限りにおいては、日本が何か独自外交をしようすれば、そこに当然

割って入ってくる、くぎを刺しに来る、このスタイルは変わらないと思います。

この何年間か特に、まだ続いているんですけども、ブッシュ政権期以降顕著になったのは、民間に対しても、アメリカの政府の圧力がかかるということです。ガバメント・トゥ・ガバメント、GtoGじゃなくて、日本側の民間に対してアメリカの政府がいろいろな形で牽制をかけてくる、これもかなり嫌らしいやり方なんですねけれども、それが随分ふえまして、日本側の活動というものが非常にやりづらくなつたということはございます。

ヨーロッパに対しても、おそらく行われてはいるんでしょうけれども、中には、それによって活動を縮小したり撤退するところもあれば、あまり変わらずやろうとしているところもあるようではあります。

アメリカとフランス、対応の差

司会 いまの最後のところ、多少付言します。田中さんがヨーロッパとロシアの関係、NATOとロシアの関係ということをいわれたんですが、例えばフランスのトタルという石油メジャーなんかは、イラン締めつけが厳しいときには、イランのプロジェクトから撤退したかのように振る舞い、そうでないときには、しぶとく、実はあれは切っていない、というふうな関係を続けているわけですね。

ヨーロッパは、ロシアのガスに対する依存度があまりにも高いということが、近年のロシアの資源外交からある種の反省点として出てきて、かわりのガスのチャネルということで、イランに対してかなりの関心を抱き続けていることも事実。それと、核開発というか、もっと別の次元の地政学の問題とのバランス、兼ね合いで、いろんな動き方をしている。特に、ビヘービアが目立つのはフランス、そんな感じじゃないかと思います。

田中 フランスに関しては、いまサルコジが大分イランに対しては強硬路線というか、ブッ

シュさんのときには、ブッシュさんよりもさらに厳しいんじゃないかというぐらいのところまで突出していたんですが、そのもとでも、いわゆる国策会社というか、国営会社であるトタルでも、結局、関係は全部は切らないんですね。その点は、経済面の部分と、それから政治イシューである核問題での対応というのは、ちょっと温度差というか、対応の差を残していて、そこはやっぱりしたたかというか、やることはまだやっているな、ということを思わせるところはあると思います。だから、その対応は今後とも続くんだろうと思います。

解決のめどが見えない核開発問題

質問 核開発は今後どういう経過をたどるのか。ウランを保有しているのはどういう内容でしょうか。終局的には核を保有するということで、核兵器を進めているんでしょうか。

田中 イランの核開発に関しては、彼らは貫して平和利用目的ということを崩していませんので、北朝鮮のように、兵器化ということを宣言したり、あるいはそれを実際にぶっぱなすというようなことはまだやろうとはしていないわけですが、問題は、ウランを濃縮しているという実態があって、それをいまの現状では何ら問題はないんですが、同じ技術をどこかで転用されてしまうと、ウラン型の核爆弾をつくることになりかねないという漠然とした不安があるんだと思います。

これは、不安を抱く側からすれば、常にあるわけですし、不安を抱かれている側からすれば、そんなのは取り越し苦労にすぎないということで、一笑に付することになるんですけども、ほとんど水掛け論のままこの何年間か過ごしてきておりまして、結果、解決のめどが全くみえないままです。

あるとすれば、この先、決定的な証拠、イランが兵器開発に転用しているという証拠が出てくるか、あるいはイランが、例えば2003年、4年ごろの対応のように、一転して一方的

に情報開示を進めるというぐらいの環境が訪れることなんですが、ただし、これが訪れるためには、安全保障に対しての脅威、特にアメリカ、ないしはイスラエルから、核兵器がないということがわかつたら、隣国のイラクのように攻撃されるという、違う意味での恐れ、それが払拭されない限りは、イラン側が開示を積極的に進めることにはならないんだと思います。

現状の対決姿勢のもとでは、少なくともアフマディネジャド路線は、そもそもイランを攻撃することなんかできっこないんだから、そんなことをそもそも恐れる必要はなく、イランはやることだけをやっても構わない、仮に世界がどれだけこの問題を疑おうとも、最終的に、イランが進めることをだれもとめることはできやしない、というところですので、少なくともウラン濃縮は拡大されます。規模は拡大されます。ただ、濃度が、いわゆる4%、5%を超えて、兵器化に必要な90%をやるかどうか、これは全然別の問題で、イランはそこはまだやっていませんし、やるともいっていません。むしろ、その点ははっきりと否定しております。

兵器化の技術と意思はあるか

司会 いまの問題で、これまでのアメリカとかイスラエルのインテリジェンスでいえば、軍事転用の可能性が出てくるのは2010年以後だ、こういうふうな時間軸の認識なんです。ということは、このままウラン濃縮拡大を続けていて、イスラエルとイランの間、あるいはアメリカの間で、来年以降はそういうテンションが高まる可能性もあるだろうという認識でいいんですか。

田中 その点も、いっている側に問題があると思うんです。それは何かというと、いわゆる技術があるのと、あともう一点は、意思があるかということなんです。兵器化するという意思の問題です。政治決定の問題ですが、この意思に関しては、アメリカのNIEのレポート、National Intelligence Estimate、2007年12月に出たやつ、これが明確に否定している

んですね。否定している中で、じゃ、技術的にはできるかどうかということでみれば、すでにはいまでもできるんだと思うんです。高濃度の濃縮を目指せば、時間はかかりますけれども、できる技術はあると思うんです。

しかしながら、IAEAの査察は受けていますし、核分裂物質もその管理下に置かれているので、IAEAの目をだまして、それをいま既存の施設で行うことはできない。

だから、2011年、12年にできるといっているのは、何に基づいていっているのかが、そもそもそれがよくわからないというか、みていて不思議でしようがないんです。

もちろん、核分裂物質が低濃度のウランであれ、例えば何百キロ単位で備蓄されていくと、それを現在、イランがウランを燃やす軽水炉を使う当てが当面ないとすれば、じゃ、濃縮されたものをどうするのかという疑問が当然わくんです。しかし、そうはいっても、それが何トンあろうとも、IAEAの監視下に置かれていって、それを高濃度濃縮に回すことができない状況のもとでは、結局、それ自体は意味をなさない話になると思います。

ですので、もちろん警鐘を鳴らすという点では、仮にきょう今日政治決定を行って、兵器化を進めるということを行って、いまある既存の設備のもとで、既存の低濃縮ウランをさらに高濃縮に回していくと、例えば2011年ごろにウラン型の原爆一発分の高濃縮ウランを手中におさめることはできる、という言い方はあると思うんですけどもね。

ナショナリズムに近い発想

質問 尊厳とか、絶対自分たちがやっていることは正しいとか、その思想の根源はコーランとか、教えに基づいているのか。それからスカーフをかぶるとかかぶらないというレベルですと、イランはそんなにガチガチではないような印象を受けるんですが、そういう考え方というのが国民一般にどの程度広くシェアされているのか。

田中 尊厳に関しては、これはイスラムに基づく尊厳ではなくて、むしろナショナリズムに近い発想だと思います。ただ、iran、イスラム共和国というところで、イスラムが入ってきますので、また国民の大多数もイスラム教徒ですから、イスラム性がゼロということではありません。しかしながら、感情としてはナショナリズムに近いものあります。

あと、さらにもうちょっといえば、革命の理想とか、革命の原理の追求というような思想だ、というふうにとらえていただければいいと思います。例えいま例として挙げられました、スカーフをかぶる、かぶらないというのは、これは——女性には申しわけないですけれども——非常に小さい話であって、国民が関心があるのはそんなことではなくて、もっと具体的にイランがどういう方向に進むかというところにあるんだと思います。

ですので、今回の選挙でまさに争点になったように、イランが孤独でも、自分たちこそ正しいと思っていれば生きていけるのか、誇り高く生きていけるのか、それとも孤立したイランは、世界の中では生きていけないから、それはそもそも間違った考え方であるのか、その差だと思うんですね。

尊厳を、やはり重視しようとすると、おのずと譲歩というものは負けだというところに行き着きますので、よりかたくなな外交姿勢というところにどうしても戻ってしまう、ということだと思います。

司会 それでは、本日の研究会はこれで終わりたいと思います。田中さん、ありがとうございました。(拍手)

文責・編集部

iran大統領選挙後の政治危機

財団法人 日本エネルギー経済研究所

中東研究センター 田中 浩一郎

1. 大統領選挙で表面化した動き

(1) ハーメネイ最高指導者の志向（偏向）

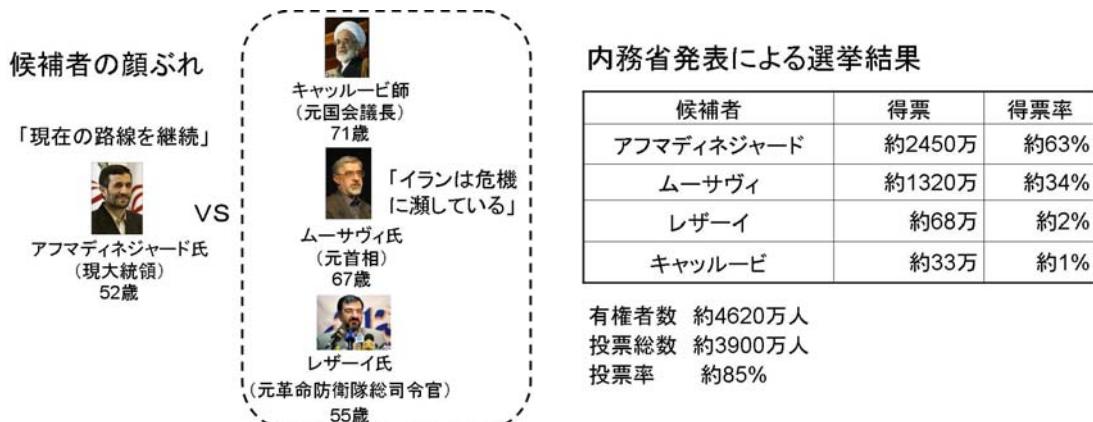
- ◆ 大統領再選への肩入れ ⇒ 一蓮托生を厭わず
- ◆ なぜ、再選支持なのか？
 - ✧ 4人の中で唯一、かつ、最良の選択として
 - 「革命以来の盟友ラフサンジャーニ師よりも、アフマディネジャード氏の方が自分の考えに近い」
 - 支持してきた以上、自分の権威と沽券にかかわる事情
 - ✧ 最高指導者にとって必要な「精算」
 - 諸機関との互恵関係や相互依存関係、しがらみ
 - ✧ 個人利益の追求？
- ◆ それでも底堅いアフマディネジャード支持
 - ✧ イランの国益を考え、国連総会に出席
 - ✧ タブーをものともせず、オバマ大統領に書簡を発出
 - ✧ 積年の課題である VAT 導入に踏み切った
 - ✧ 補助金の適正化に着手
 - ✧ 米コロンビア大学で堂々と演説し、批判の嵐に晒されても逃げなかった
 - ✧ 憲法が定める範囲の中で、大統領の職務を全う
 - ✧ 資金洗浄対策法を成立させ、汚職追放を目指した



(2) 選挙戦の争点の移ろい

- ◆ 経済政策（ばらまきの是非）+外交政策（対決路線の是非および対外イメージ）
- ◆ タブーに挑戦：ホメイニ師と歩んだ革命の闘士に対する批判 ⇒ 革命原理優先
- ◆ テレビ討論の模様
 - ✧ 実績に基づく自信の現れ
 - ✧ 批判に対する意趣返しの場
 - ✧ ラフサンジャーニ個人攻撃でムーサヴィに打撃を与える「一石二鳥」
 - ✧ 「古い世代は引っ込んでいろ！」のメッセージ

✧ ハーメネイのムーサヴィ嫌いを見越した上での態度



ア：自分の政権に対して行われた、前例のない、公平性に欠けた、嘘八百にまみれた批判に抗議する	
ム：戯言や独りよがりに基づく運営によって、國家が崩壊に向かっていると危機を感じたからこそ、自分は立候補した	
ア：特に、外交面での勝利に関して批判が顕著	
ム：例えば、サウジとの関係は悪化し、外交政策ではイランの尊厳を潰したのではないか？	
イランとイラン人の信用は地に落ちた！	
ア：革命を乗っ取ったムーサヴィ、ラフサンジャーニ、ハータミの3人は自分の政府を発足時から攻撃した	
ム：彼らとテレビ討論を行えばいいだけの話	
ア：この政府は国民に奉仕した実績がある	
ム：大統領と政府は脱法や違法行為など、勝手なことばかりしている	
ア：自分はイラン全土を回り、その問題を理解している	
ム：政府と法学者の間に断層が発生している	
ア：この選挙は1対3だ！	
ム：政府こそ、「身内」と「それ以外」しか識別していない	

(3) イラン社会に生じた断層

- ◆ 古典的な、「都市部中産階級」 対 「地方・農村部」 の差異
- ◆ 新機軸としての、「正義と公正を追求する孤高のイスラーム共和国」 対 「『普通の国』 イラン」

2. 選挙結果をめぐる疑問と対立

(1) 内相発表による投票結果

- ◆ 開票速報を通じて一定していたアフマディネジャードとムーサヴィの得票率 ⇒ 人気に地域差がない？
- ◆ 記録的な投票率（84.77%） ⇒ 過去に例なし！
- ◆ キャッルービ候補の轟沈 ⇒ 前回の票はどこへ？
- ◆ 多量の予備投票用紙の配布 ⇒ 有権者 4620 万人に対して 5900 万！
- ◆ 投票日に発生した投票用紙不足と増刷 ⇒ 予備分はどこへ？
- ◆ 前々日に垂れ流された「世論調査結果」なるものの数値との近接 ⇒ 不正（票操作）の「尻尾」か？

(2) 票操作をめぐる仮説

- ◆ 第1回投票での再選シナリオを用意
 - ✧ 票の分散を避けながら、有意差を確保する
 - 決選投票は現職敗退に等しいレベルで体制にとって好ましくない状況と判断
 - ムーサヴィ氏の実際の得票に応じて、アフマディネジャード氏の得票を水増しした上で追加
- ◆ 本シナリオに従って開票（票操作）を進めたが、最大の誤算は実際の投票率が上がったこと
 - ✧ 投票用紙の不足が表面化 ⇒ 予備はどこへ？
 - ✧ 投票率が 100%を超えるかねない事態に

(3) 選挙不正に関するムーサヴィの抗議事項

- ◆ 投票前の投票箱の状態の確認と封印がなされていない
- ◆ 候補者が指名する投票所の立会人に対し、ID カードが発給されず、あるいは不備があるために実際には使用不能で、さらには投票所から追放されるケースが続出した
- ◆ 移動投票箱の大量増設
- ◆ 有権者数を遙かに超える投票用紙の用意にもかかわらず、一部で発生した投票用紙の不足
- ◆ 投票時間の延長に対する制約
- ◆ 投票済みの投票箱に対する監視体制の欠如
- ◆ 開票作業中、常に一定した候補者間の得票率

3. 今次選挙が示唆する国家運営方針

(1) 練り上げられた反対派封じ込め

- ◆ 憲法擁護評議会にて異議申し立てを受理し、時間稼ぎ
 - ✧ 審査で最大 10 日間の猶予 ⇒ 5 日間の特例延長 ⇒ 6 月 29 日発表
 - 特例延長によってもたらされた差は、ラフサンジャーニ師の恭順姿勢
- ◆ 1999 年と 2003 年の記憶を呼び覚ますことで、大衆運動の勢いを殺ぐ
 - ✧ 左派活動家やイデオロギーの封じ込め
 - ✧ 通信および報道規制
 - ✧ 「恐怖と戦慄」作戦
 - テヘラン大学などで学生寮を襲撃
 - デモ参加者を尾行し、闇に乗じて襲撃
 - バシージなどに発砲許可を付与 ⇒ Neda Aqa Soltan 射殺事件
- ◆ 外国や外国メディアをけん制しつつ、彼らによる扇動を喧伝
- ◆ これで効果が薄い場合には、革命防衛隊の部隊投入が待ち受けていた

革命防衛隊 2009 年 6 月 22 日付声明

- 法の遵守による危機脱出を示した最高指導者の指針にもかかわらず、不法行為や騒乱、公共財の破壊、さらには暴民による市民への攻撃が継続していることは、イランの革命と国民に対する巨大な陰謀の証左である。
- 革命防衛隊は、首謀者とその要員が国家の利益に則って行動し、破壊活動に終止符を打つよう警告し、彼らが従わない場合には断固たる措置を探る用意がある。
- 一部の候補者による違法抗議デモの呼びかけが騒乱を引き起こしていることから、治安維持軍とバシージは、暴民との対決を躊躇わないことは明白である。
- 革命防衛隊は、世界の傲慢な勢力の指導者、特に米国、英国、イスラエルに対し、内政干渉と脱法者支援の件で警告を発する。

(2) 政策の継続と連続性

- ◆ 国内政策では、名実ともに強権的になる可能性
- ◆ 経済面では再選を可能にした「ばらまき」路線を堅持
 - ✧ イラン商工会議所ミッションの発した一言（5 月 28 日、東京にて聴取）
 - 「再選の場合には、最高指導者が指針を示した、従来の政策が肅々と進められる一方、政権交代が生じた場合には、民営化が加速する」
- ◆ 大胆な閣僚人事への着手
- ◆ 再び出だしで躊躇したことから、いつそう捻くれる可能性
 - ✧ 政権 1 期目：「強硬派」のレッテル貼り、米大使館人質事件への関与説など
 - ✧ 政権 2 期目：正統性への疑義と抗議デモの封殺によるマイナスイメージ

4. 大統領再選が内包する意味を考える

(1) イラン版「チェンジ」の否定

➤ オバマ政権の誕生はイランの正当性を立証

- ◆ イランの勝利はすなわちハーメネイ師が支持するアフマディネジャード路線の成功
- ✧ 核開発：核開発計画を従来通りに進めるプランを保有
- ✧ 対米関係の修復：対話を標榜するオバマも騒乱によってジレンマに直面
- ✧ 中東和平など、域内外の諸問題への態度
- ✧ イスラエルによる単独攻撃の可能性
- イスラエルにとって好都合か
- ◆ オバマ大統領の対話呼びかけをめぐる、イラン側の混乱と戸惑いも作用

(2) イランの命運

➤ 変わらなかつた選挙結果

- ◆ 最高指導者の権威と沽券に直結する問題
 - ✧ ここまで大胆に踏み出した背景 ⇒ 自信？ 過信？
 - ✧ ハータミ師とムーサヴィ氏の相違を過小評価
 - ✧ 6月19日の金曜礼拝演説は不退転の決意の現れ

➤ イスラーム共和国の国家運営の変質

- ◆ 「民主主義」の看板より、統治体制の当座の安定を重視

➤ ハーメネイの調停者や仲裁者としての機能喪失

- ◆ アフマディネジャード政権が国内で強権的性質を露にすると、摩擦は増加

➤ 抗議行動の拡大を外国（米国）の介入に転嫁する流れ

➤ 過去20年間の「安定期」から、「不安定期」への回帰か

- ◆ 「外部不経済」である「塵や埃」が抱く不満を内部化できない弱み